

ラオスにて思うこと

奥田 佳朗

日本国際協力事業団（JICA）は、ラオス国政府の要請を受け、広い分野でラオス国への政府間援助（ODA）を行っている。1992年から5年間、琉球大学医学部が公衆衛生プロジェクトに従事し、その実績が認められて引き続きセタティラート病院改善プロジェクトの要請がきたため、ちょうど定年退職を迎えた私はよい機会と思い、ラオス国に足を踏み入れることになった。

言うまでもなく、発展途上国の援助とはその国が目指す近代文明化を援助することである。20世紀後半、世界は東と西に分かれ、東側は全体主義的共産主義・国家的計画経済・科学技術、一方の西側は自由民主主義・市場経済・科学技術をそれぞれ三本柱として、世界の覇権をかけて競い合った。1990年のソ連の崩壊によって西側の三本柱が勝ち残り、これが21世紀の目標とされ、発展途上国が目指すべき近代文明化の目標は、一に自由民主主義（liberal democracy）、二に市場経済（market economy）、三に科学技術（science and technology）ということになった。

1975年、ラオス現政権は共産主義革命によってラオス王国政府を倒し、ラオス人民革命党の指導のもとにソ連、北朝鮮、中国の援助を受けて、共産主義・計画経済による近代国家の建設を目指した。しかし目標の達成は難しく、91年に西側の三本柱を根幹に据えたラオス人民民主共和国憲法を制定した。方向修正を行うことで、民主主義と市場経済を今後のラオス国の方針とし、さらに科学技術の進歩と仏教の保護を目標と定めたが、ラオス人民革命党の一党独裁は現在も続いている。

私たちの従事しているセタティラート病院改善プロジェクトは、近代文明化の三本柱の一つである科学技術のうちの医療分野だけを受け持って、ラオス国の近代文明化を進めている。医療分野は人間生活にとって不可欠であり、基本的に異論の出ない分野であるが、科学技術という近代文明化の一部分だけを推し進めようとするところに問題が生じる。たとえば、市場経済が未発達のために経済原理に基づいて患者から治療費を徴収できない。ラオス政府の病院への補助はわずかな人件費のみである。したがって、医療機器を供与し、操作する技術を修得させても、維持費とランニングコストが自力で確保できない。これは、わずかな消耗品の欠乏、当然生じる機材の損耗に自力で対応できないことを意味し、無償供与した先端



著者（左）と
ドクター・バンギュー

奥田 佳朗 / おくだ よしあき

1935年、北海道生まれ。62年、札幌医科大学卒業。山口大学助教授、英国リーズ大学研究員を経て、81年より琉球大学医学部麻酔学教授。2001年より、日本国際協力事業団（JICA）によるラオス国セタティラート病院改善プロジェクトに参加。

▶ メールアドレス: okuda@laotel.com

的医療機器の稼働は、日本からの援助がなければ早晚停止し、放置されることになる。さらに、ある部分の稼働が停止し放置されていても、その情報が伝達されにくい。これは職員個人の判断を正しく公式に表現できなかった制度と習慣が残っていて、病院運営の民主化が未発達なことを意味している。つまり近代文明化の三本柱がバラバラなのである。ここに問題の焦点がある。

もちろん、ラオス側指導者層はこの状況を知っており、当然、われわれも上記のような事態を回避することが、わがプロジェクトの重要課題であると理解している。現実には病院管理運営の面に対策を講じており、確かに部分的には改善が見られるようになった。わがプロジェクトを直接管掌するヴィエンチャン特別市保健局が年間活動計画会議を開き、われわれプロジェクト側からも意見を述べる機会があった。私は、前述の三本柱が平行して同時に進歩することの重要性を指摘した。しかし、この会議も相変わらず局長、病院長などの指導者層が年間の成果を発表し、聴衆が拍手して、そのあと功労者の表彰が行われるという型にはまったものだった。この国では厳しい議論の応酬がない。少なくともわれわれの見える範囲ではそうである。

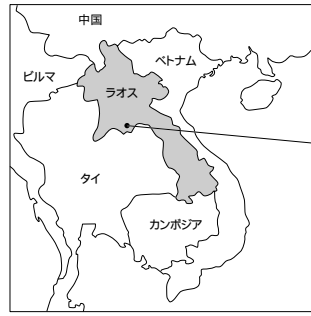
ところが、数日後、病院のある医師が私の述べたことをきわめて遠慮がちに話題にしてきた。一般にラオス人は大きな声でしゃべらない。日本人のようにばたばた走り回ることもない。これはもともとラオス人の体質のようだが、この国の政治形態、つまり言論統制の習慣がまだ残っているともしえる。ともあれ、その話を聞いていて思いもよらぬことに気付かされた。まず、リベラルという言葉から抱く意味がお互いに違っていたことだ。ラオス人はリベラルという言葉に、「個人の勝手気ままな行為を許すこと」という負のイメージを持っているのである。

実は、会議の前に、ラオスで一番の小児科医である副院長のドクター・カンベと話をしたとき、「ラオス人はリベラルという言葉違った意味にとるだろう」と彼に言われたことがあった。そのときの私はこの指摘の意味が理解できなかった。

ラオス人にとって、個人の自由の前にはよかれ悪しかれ国家がある。だから、国家の前提なしに丸裸の個人の自由はあり得ないし、国家の示す規律とか規範を無視した個人の放縱な行為は許されない。これを、単に前近代的な排除すべき全体主義とか迷妄な国家主義



セタティラート病院外観



(*) タイ族とラオ族はもともと同じ
広義のタイ族で、ラオ語はタイ
諸語の一つ。

といえるのだろうか、このラオス人は問うているのである。これは正しい。個人の自由が国家の存続より優先すべきなどという議論は、日本国内では言ってもよいが、世界の現実の前では成り立たない。

ここで少し余談になるが、日本語を解さないラオス人と、ラオ語を解さない私が、お互い不確かな英語でこのような話題をどのようにコミュニケーションしているのかを説明する必要がある。初めに私が疑問に感じたのは、思想とか哲学にかかわる抽象的な意味を持つ適切な単語がラオ語にあるのかということだった。なぜなら、ラオ語に訳されたこの種の書物がほとんど見当たらないからである。ほぼ2年間、毎週2回私の家でラオ語を教えてくれるラオス人の先生がいて、国立ラオス大学のラオ語の講師なのだが、彼が言うには、そのままではまる単語がなくても数語を組み合わせて訳すことはできるそう。また、タイ語にはサンスクリット語から取った抽象語が多い上に翻訳書もたくさんあって、そのタイ語をラオス人はほぼ80%理解できるといふ*。実際には、英語の読めるラオス人秘書と、オーストラリアのタスマニア大学で6年間学んだ経験のあるラオス人医師とが共同で、私の書いた英文をもとにラオ語のサマリーを作り、事前に配布してプレゼンテーションを行うという方法を取った。

話をもとへ戻そう。国家を前提として個人の自由を考えるのが当然と思っているラオス人のことを先に述べた。戦後の日本人にとっては、自由と平等は基本的な人権として日本国憲法が定めたように、ごく当たり前のこととなった。そしてそれ以降、日本人は「国家」という言葉を避けてできるだけ使わないようにしてきた。なぜなら、個人の自由の拡大と生命の存続を至上の価値と信じ、この50年間多くのものをぶち壊したり作ったりしてきた以上、それを越える価値観があると認めることに内心恐れを抱いているからである。しかし、国家と国境が厳然として存在する以上、個人的自由と生命を犠牲にすることを個人に要請し得るものが「国家」であるということには気が付いており、そして自国に対してそれを確信できないものが、どうして他国から信頼される活動ができればかということもわかってはいるのである。

はっきり「国家」と言ったほうが筋の通る話の場合でも、その議論はわかった、もういい、とやんわり抑えられたり、時にはその場の雰囲気やぶち壊すことになったりして、「国家」を話題に持ち出すことはむしろ無粋なことと自ら避けようとする自己規制が働くこともある。日

本では、特に沖縄はそうだった。ラオス人と話しているとこれがない。

手術後、病院前の屋台でラオス人たちといっしょに夕食をとっていたとき、国家に対する国民の義務は「納税の義務」と「国防の義務」、この2つだと断言したすぐあとで、でもこの国の政府はわれわれのために何もしてくれないなあ、と、声を落として言ったフランス語の達者なラオス人麻酔医がいた。セタティラート病院麻酔科医長で、私のカウンター・パートでもあるモン族のドクター・バンギューである。ヴェトナム戦争のとき、ヴェトナム国境に近い山地にあった彼の部落は突然爆撃を受け、住民一人当たり1トンの爆弾が降ってきたという。彼の肋骨にはそのときの破片が今も残っている。モン族は山地民族の中でも結束力が固く、戦闘員として優秀だったため、どちらからも利用され、拳闘はモン族同士で戦うという悲惨な状況に陥り、モン族の虐殺が各地で起きたそう。この種の話は色々聞いたが、しかし、この国ではこの類の話題は避けたほうがよいのだらうと私は感じている。

国家と個人の関係は、それぞれの国によって違う。特に発展途上国は、歴史的にも現状によってもその国によって著しく異なる。発展途上国の援助ということになると、被援助国政府は強力に近代化を目指そうとし、援助国は近代文明の普遍性を根拠に強力な変化を相手国に迫ろうとする。問題は、近代文明の普遍性と発展途上国の多様な文化の固有性ととの折り合いをどのようにつけるかであろう。現代の最大の課題である。

ラオスは今、食糧飢饉による餓死者もなく、戦争による難民もない。国連指定の最貧国とはどうしても思えないほど物も心も豊かに見える。アフリカの各地やアフガニスタン、戦争後のイラクのような厳しい環境の中で行う援助活動と、ラオスの場合は状況が著しく異なる。今は新型肺炎で旅行者が減っているが、普段は欧米からの旅行者が気楽な散歩やお寺めぐりをして、山や川の豊かな自然を楽しんでいる。ラオスへ来た人々が異口同音に、この国へ来てほんとに、気持ちがいいと言う。100年前、ラオスを植民地としたフランス人は、ここはシャングリラ(Shangri-la)だと言った。シャングリラとは、地上の楽園とかこの世の理想郷を意味する。海のない国ラオスが、「母なるメコン」に寄り添って静かに在り続けていることは、人類の宝なのである。